

# 接触場面での非対称的關係はいかにして構築されるか？

## ー日本語初対面会話におけるインポライトネスからみる事例分析ー

藤平真由美(放送大学大学院)

### 1. 研究の背景

接触場面の日本語母語話者 (NS) は非母語話者 (NNS) に対して強いカテゴリー化期待があることが指摘されている (高, 2003). またカテゴリー化を行うことによって, 両者の非対称的關係が相互行為的に構築されるとも言われている (西阪, 1997). このように NS と NNS の間に非対称的な關係が構築されやすいとの研究はあるが, その過程を焦点化しインポライトネスの観点から検討したものはない. また非対称的關係構築の結果, どのように NNS にとってインポライトと知覚されアイデンティティに影響を及ぼすのか, その過程は未解明である. 日本語は典型的な「敬語型言語」であるとされ言語形式が目立ち (滝浦, 2020), 会話において話し手は言語形式であるスピーチレベルの選択, すなわち普通体/丁寧体のいずれかを選択する必要がある. 同時にその選択には話し手のアイデンティティや役割期待が反映するだろう. そのような言語形式と発話内容の關係性に注目しながら, NS と NNS の非対称的關係の構築に関して考察を行うことには, 接触場面のあり方を考える上で一定の意義があると考えられる.

### 2. 研究目的と課題

そこで本研究は, 接触場面において NS と NNS の非対称的關係が構築される過程を, アイデンティティと役割期待の観点から具体的に明らかにすることを目的とする.

以下の3点を研究課題とする.

- (1) 接触場面の日本語初対面会話で非対称的關係が構築される際に, 言語形式と発話内容のどのような変動が見られるか. また, 両者の間にどのような関わり合いが見られるか.
- (2) NS と NNS が自己に期待するアイデンティティと相手に対する役割期待が, 会話の進行にどのように影響していると考えられるか. また, 会話内でカテゴリーのスイッチングがどのように行われるか.
- (3) フェイス保持と侵害に関し, フェイスに関するバランス行動とインポライトネスがどう関係しているか.

### 3. 先行研究

接触場面の非対称的關係に関する研究は多い. 西阪 (1997) は, ラジオ番組での留学生と日本人アナウンサーの会話分析から, 両者が「日本人/外国人」とのカテゴリー化によって非対称的關係を相互行為によって構築すると指摘している. 高 (2003) は, 接触場面のカテゴリー化をめぐる管理過程に関し分析を行った結果, NS の強いカテゴリー化への期待が見られ, また NS 自身の期待実現のために NNS にカテゴリー化交渉を行っていることを示している. そして NS のカテゴリー化期待の要因として, NNS をカテゴリー化することにより自己の優位性を確認したいという期待の存在および NS の権力が働いていることを指摘している. だが, カテゴリー化に関する研究は見られても, 会話参加者のアイデンティティや役割期待の相違を焦点化した研究は少ない. 一方, 三牧 (2013) は Brown & Levinson のポライトネス理論によるフェイス概念を援用し, 談話レベルで接触場面の NS と NNS のフェイス侵害行為のバランス行動を分析した結果, 両者が相互行為的にそれらの質量両面でバランスを取っていると指摘している. また第二言語話者のアイデンティティに関し, Siegal (1996) は日本語学習者がアイデンティティを表すために主体的に特定の言語形式を使用すると, 母語話者とのコミュニケーションに齟齬が生じる場合があると述べ, また学習者は母語話者との相互行為により, アイデンティティを再構築していくと指摘している. しかしながら, 談話中のインポライトネスの生成過程を言語形式と発話内容の観点から分析した研究は, 管見の限り見当たらない.

## 4. 分析方法と結果

### 4.1 分析方法と会話概要

接触場面の会話を多く含む『BTSJ 日本語自然会話コーパス 2020 年版』(宇佐美, 2020) の初対面同性同士雑談の中から、NS (JF135) と台湾人 NNS (TFA011) の非対称的關係が顕在化してくる会話 1 事例(会話グループ名:20, 会話条件:281-20, 話者:JF135 と TFA011, 女性同士, 会話時間:16 分 45 秒)を取り上げ、トランスクリプトと音声における非対称的關係の生成過程を質的分析した。その際、言語の形式面と内容面の關係性の観点およびアイデンティティと役割期待の相違に焦点化して分析・考察した。会話参加者の NS は日本人大学 3 年生で、一方 NNS は台湾人留学生の大学 2 年生であり日本語レベルは上級である。

### 4.2 分析結果

本節では言語形式と発話内容からの検討 (4.2.1) とアイデンティティと相互の役割期待からの検討 (4.2.2), またフェイス侵害行為とインボライトネスからの検討 (4.2.3) の結果をそれぞれ述べる。

#### 4.2.1 言語形式と発話内容からの検討: 抜粋 1

会話事例の冒頭部分(抜粋 1)について、言語形式と発話内容からの分析を行った。まず、言語形式のうちスピーチレベルに変動が見られた箇所に着目した(表 1)。次に、それらの変化が何を表しているのかを発話内容も含め検討した。

【抜粋 1】		44 JF135	大学はですね、えーと、何だっけな、言語情報科学っていうところにいるんですけど。
1 JF135	はじめまして。	45 TFA011	は、はい。
2 TFA011	はじめまして。	46 JF135	学部っていう、学科かな、学科がそういうところで、だから一応言語学とかをやっているんですけど。
3 JF135	こんにちは。	47 TFA011	言語学って、(あなんか)どんな勉強してますか?。
4 TFA011	こんにちは<笑いながら>。	48 JF135	うんと、なんだ、こう英語の文の構造とかをマニアックに見てた、(はい)とかそういうことをやっています。
5 TFA011	急いできたね?[急ぎ足で部屋に入ってきた JF135 を見て]。	49 TFA011	え、国語、例えば日本語のは、
6 JF135	え?。	50 JF135	うん、にほ、
7 TFA011	急いできた?。	51 TFA011	どんな勉強ですか?。
8 JF135	いや、そう。	52 JF135	日本語はねー、私の学科ではやってない。
9 JF135	ちょっと今本を読んでいたら、(あ)時間を忘れてしまってますね、	53 TFA011	あ、
10 TFA011	<そうなんです>{<}。	54 JF135	うん。
11 JF135	<“あ、もう 50 分”{>}じゃん”と思っ、来たわけてございます{<}。	55 TFA011	じゃ、あな、たの方は(うん)英語の方、勉強してます?。
12 TFA011	<あそうですか>{>}、そうですか、はい。(19 行省略)	56 JF135	うん、<そうそうそうそう>{<}。(7 行省略)
32 JF135	あー私は 3 年ですね、こう見えても。	64 JF135	ん、どこの大学なんですか?。
33 TFA011	あ、3 年生ですか。	65 TFA011	あ、「TFA011 の在籍大学名」です。
34 JF135	うん。	66 JF135	おお、でかいですね。
35 JF135	昨日もバイトだったんですけど、あー、高校生教えてるんですけど(へー)。	67 TFA011	<笑>ただ学生が(うん)たくさんいるだけで。
36 JF135	“てっきり、生徒かと思いました”とか言っって言われたんですけど、まあ、そんなこんなで、でも実は 3 年でございます。	68 JF135	うんうんうん。
37 TFA011	へえ。	69 JF135	え、何を勉強してんですか?。
38 JF135	はい。(4 行省略)	70 TFA011	あ、あたしは経済学部で、勉強してる。
43 TFA011	え、大学ではどんな勉強してますか?。	71 JF135	ふーん。
		72 TFA011	はい。

表 1 抜粋 1 のスピーチレベル・シフトにおける注目箇所(話者 J の部分に網掛けを付した)

ライン	話者	シフト	シフト内容	ライン	話者	シフト	シフト内容
(1-4)			(丁寧体での挨拶交換)	35	J	↗	丁寧体に戻す 以後自分語り「…んですけど」の頻用 (6 回)
5	T	↘	普通体での問いかけ	36	J	↗	最丁寧体発話(「…でございます」)
6	J	↘	普通体応答(「え?」)以後もう 1 往復普通体で行う	37	T	↘	普通体応答(「へえ」)以後丁寧体ベースで J の応答のみ普通体にシフトダウン
9	J	↗	丁寧体へシフトアップ	56	J	↘	強調的普通体応答 以後アイデンティティに関わる肯定的発話に対して「うん、そうそうそうそうそう」など肯定強調的応答
10	T	↗	丁寧体応答	70	T	↘	普通体発話(丁寧体問いへの自分語り)
11	J	↗	最丁寧体発話(「…でございます」)以後丁寧体ベースに	71	J	↘	普通体応答(「ふーん」)
34	J	↘	普通体応答	72	T	↗	丁寧体応答

話者記号: J JF135, T TFA011 シフト記号: ↘ シフトダウン, ↗ シフトアップ

シフト記号は直前の発話からの変動だけでなく、それに合わせて後続話者がシフトチェンジした場合にも付す

抜粋1の冒頭でNS (JF135, 以下J)と台湾人NNS (TFA011, 以下T)が丁寧体で挨拶を交換(1-4)した後、Tが普通体で問いかけ(5)を行ったことが発端となる。Jは普通体で驚いた様子で問い返しをする(6)が、1往復後に丁寧体に戻し、次いでTはそれに合わせたように丁寧体で応答する。ここでJはさらに最丁寧体にシフトアップし、以後は丁寧体ベースの会話となる。そして34行目でJが応答を丁寧体「はい」から普通体「うん」にシフトダウンする。応答以外の発話部分は丁寧体で行う一方で、Jは自分語りに関しては強調的な「…(ん)ですけど」を6回と頻用し(35, 36, 40, 44, 46)、36行目に至っては再び最丁寧体へのシフトアップを行う。37行目以降は丁寧体ベースの会話でJの応答のみ普通体となる中、自分の専攻を聞かれたTが普通体で応答(70)したところ、Jは無関心そうに普通体で返答(71)し、Tは再び丁寧体に戻す(72)。Tの普通体発話に関しては次項以降での検討を要するが、Jが何らかの理由でスピーチレベル・シフトを行うと、Tがその示唆に誘導されるようにシフトを行っているように見える。全体的な流れとして、Jは普通体からスピーチレベルを二段階のシフトアップで釣り上げてTを追いつけておいて、自身の応答のみ普通体に下げつつ、他方で最丁寧体発話も交えるなどをしてTを丁寧体に留める。そして、自身のアイデンティティに関する話題では「…(ん)ですけど」で強調しながら、Tが行うJ自身のアイデンティティを肯定する内容の発話には、普通体の強調的応答を多用して返すことによって、自己のアイデンティティを臨時的に構築する。その一方、Tのアイデンティティに関わりそうな話題については、Tが在籍大学名を述べた発話(65)に対し「おお、でかいですね(66)」で返し、Tの謙遜に対して強調的普通体「うんうんうん(68)」で応答するなど、露骨なインポライトネスが見て取れる。以上より、Jはスピーチレベルを操作しながら、自己のアイデンティティに関わる有利な話題展開を行う一方、Tのアイデンティティに対しては無関心やあからさまな否定的評価などのインポライトネスによって貶める方向で操作していると見ることが出来る。

#### 4.2.2 アイデンティティと相互の役割期待からの検討：抜粋1、抜粋2

前項の分析から、Jのアイデンティティ構築に関連してスピーチレベルの操作が行われる様子が観察された。では、なぜJはアイデンティティに関してそのような操作を行い、他方Tはアイデンティティをどのように認識していたのだろうか。本項では両者のアイデンティティと役割期待に焦点を当てていく(抜粋2は抜粋1の後続部)。

##### 【抜粋2】

- |           |                                    |           |  |
|-----------|------------------------------------|-----------|--|
| 73 JF135  | え、出身はどこなんですか?。                     | 82 JF135  | ふーん。   |
| 74 TFA011 | ん、台湾です。                            | 83 TFA011 | 日本ブームですよ。  |
| 75 JF135  | 台湾ですか。                             | 84 JF135  | へえ。  |
| 76 TFA011 | はい。                                | 85 TFA011 | なんか日本のものは、全部なんか、例えばこの物は日本から来た、と書いたら(うん)すごくバカ売れですよ。 |
| 77 JF135  | へー、そうだ、台湾と言えば、一昔前に、チャゲアスってやってました?。 | 86 JF135  | へえー。   |
| 78 TFA011 | はい?。                               | 87 TFA011 | 恥かしくてねー。   |
| 79 JF135  | チャゲアンドアスカっていう、音楽の。                 | 88 JF135  | ほんとにー。   |
| 80 TFA011 | あ、はやってるはやってる。                      | 89 TFA011 | バカ売れですよ。   |
| 81 TFA011 | 今、すごく(うん)向こうは、日本ブームだよ。             |           |  |

まずJは、抜粋1の自分語りにおいて、Tよりも1学年上(32)であり講師のアルバイトをしている(35)ことを示しつつ、大学の専門が言語学および英語である(46)と発話していた。さらにTからの英語専攻の確認についても「うん、そうそうそうそう。」と強調して応答していた(56)。そして以後の会話の抜粋2で、Jは大学生同士の話からTの出身地を問いかけることで話題を転換し、「日本/台湾」という話題展開に移す。以上から、Jは自身の能力の高さを示すことで優位性を確立しようとする様子が見られ、さらに自己のアイデンティティに関する語りにおいて意図的に自己優位の内容を選択していることが見て取れる。その際前項で述べた言語形式の操作は、自己の優位性を確立するための一つの手段となっていることがわかる。Jは、まず抜粋1において「大学生同士」というカテゴリー化を行い、次いで抜粋2では「日本/台湾」という異なるカテゴリー化に移行している。つまり、まず前者のカテゴリー化でTより上位的立場であることを確保した上で、後者の「日本/台湾」のカテゴリー化にスイッチングし、さらに優位なアイデンティティ構築を試みていることが見て取れる(カテゴリー・スイッチング)。よって、JのTに対する役割期待は自身よりも下位となることを志向する一方、自己のアイデンティティはTよりも上位であるという非対称的関係を期待している様子が明らかになった。次にTに関しては、抜粋1で初対面の挨拶交換後にJに普通体で話しかける。その後Jのスピーチレベル・シフトに追随しつつも時折普通体へシフトダウンを試みるが(37, 70)、結果的に丁寧体ベースに留まる。Tが日本語学習者であることを考慮すると丁寧体で話すことに慣れていると思われ、また大学生でも初対面場面では丁寧体が一般的であろう。だが、Tの出身地である台湾でのコミュニケーションの文化的な影響の可能性や、日本語レベルが高く上級であることを鑑みると、TはアイデンティティをJと対等な「大学生同士」であると捉えたゆえに普通体で発話したとも考えられる。以上より、JとTのアイデンティティと相互の役割期待に相違があると言えよう。

### 4.2.3 フェイス侵害行為とインポライトネスからの検討

4.2.2の結果、Tが初対面の挨拶交換後にJへの質問を普通体で行うことから、TはアイデンティティをJと対等なものとして認識している様子が見られた。では、JがTに普通体で問いかけられた直後に、スピーチレベルを急速二段階にシフトアップするのはなぜか。それは、JがTに普通体で話しかけられたことを、自身の上位的アイデンティティ志向およびTへの下位的役割期待に照らして、フェイス侵害行為でありインポライトだと認識したからではないか。そのため抜粋1の32行目において、「あー私は3年ですね、こう見えても。」とTより上位であることを主張し、Tへのフェイス侵害行為を行いつつ自己のフェイス補償を試みている。そして4.2.1の分析結果から、Jはフェイス侵害行為を行ったとみなしたTに対し、否定的評価などのフェイス侵害行為を行っていることがわかった。これは談話レベルで見るとフェイス侵害行為におけるバランス行動であるとも言える。しかしこの結果にはTのアイデンティティを貶める報復的インポライトネスとしての側面が現れており、このことを考慮するとフェイス侵害のバランス行動の範囲を超えていると言わざるを得ない。他方Tの立場においては、対等なアイデンティティとJへの役割期待がJに拒否されたのみならず、最終的には自文化を恥づかしい(87)と述べるに至る。総じて、JとTのアイデンティティと相互の役割期待の相違からJの報復的インポライトネス行為が行われ、その結果、Tにとってインポライトと知覚されるものと推測される。

## 5. 考察と結論

以上、接触場面の日本語初対面会話の1事例において非対称的關係が構築される過程を、アイデンティティと役割期待の観点から質的分析を行った。4.2.1の分析結果から、Jは自己のアイデンティティに対しては有利に働くようスピーチレベルを操作した一方で、Tのアイデンティティに関しては否定的な操作を行っていた。次いで4.2.2の結果からは、JはTに対して下位者としての役割を期待し、他方TはJに対して自身と対等の役割期待を持っていることから、お互いの役割期待が異なるという洞察が得られた。最後に4.2.3の結果から、JとTの自身のアイデンティティと相互の役割期待の相違がJの報復的とも取れるインポライトネス行為を引き起こし、ついにはTに対するほとんどマウンティング行為とさえ見える非対称性が構築されたことが確認できた。

以上の結果から、接触場面の日本語会話で非対称的關係が構築される場合において、参加者間での役割期待の相違が要因となり、NSは自身が優位となるアイデンティティを構築しようと言語形式と発話内容の両面から操作を行い、結果的にNNSに対するインポライトネスのコミュニケーションとなる可能性が示された。つまり、NNSのアイデンティティの表れと思われる普通体発話がNSの上位者としてのアイデンティティ危機を招いたことが契機となり、NSが報復的にスピーチレベルを巧みにコントロールし、同時に発話内容面において、まず大学生同士というカテゴリー化において優位なアイデンティティを構築した上で、さらにNSが優位になりうる「日本/台湾」というカテゴリーへのカテゴリー・スイッチングを行った結果、両者が相互行為的に非対称的關係を構築していったと考えられる。高(2003)や西阪(1996)の指摘と以上の検討結果を合わせて考えると、NSが上位者としてのアイデンティティ構築および保持を期待することがカテゴリー化の要因となり非対称的關係が構築される可能性があると考えられるだろう。三牧(2013)は、接触場面の談話レベルで、会話参加者が相互にフェイス侵害行為の質と量のバランスを取ることを明らかにしている。しかし、本研究の結果ではNSのフェイス侵害行為はバランス行動を超えた報復的な行為となっていることから考えると、会話参加者が対等な関係を望み相互の役割期待が対等なものとして一致する場合にはフェイス侵害行為のバランスを取るのに対し、本事例のようにそもそも会話参加者の相互の役割期待が一致せず、NSが非対称的關係を志向していると思われる場合は、NNSにとってインポライトとなるような行為が誘発されやすいと考えられるのではないだろうか。Siegal(1996)は、日本語学習者が自身のアイデンティティを表すために主体的に普通体を使用する事例を検討し、母語話者とのコミュニケーションを通して学習者のアイデンティティが再構築されると述べている。本研究の結果も合わせると、NNSがNSに対して普通体で発話することが要因となり、両者に非対称的關係が構築された場合、NNSの第二言語話者としてのアイデンティティ再構築に影響を及ぼす可能性もあると言えよう。

### 参考文献

- 高民定(2003). 接触場面におけるカテゴリー化と権力 宮崎里司・ヘレン マリオット(編) 接触場面と日本語教育: ネウストブニーのインパクト 明治書院 pp. 59-68.
- 三牧陽子(2013). ポライトネスの談話分析—初対面コミュニケーションの姿としくみ— くろしお出版
- 西阪仰(1997). 相互行為という視点—文化と心の社会学的記述 金子書房
- Meryl Siegal(1996). The role of learner subjectivity in second language sociolinguistic competency: Western women learning Japanese. *Applied Linguistics*, 17(3), 356-382. Oxford University Press.
- 滝浦真人(2020). この地でポライトネスを考えることの意味を考える *Human Linguistics Review*, No. 5, pp. 1-14. コーパス
- 宇佐美まゆみ監修(2020). BTSJ 日本語自然会話コーパス(トランスクリプト・音声)2020年版 国立国語研究所